令和５年６月３日配布

第 331 回山口西田読書会プロトコル

村上優子記

１．範囲

西田幾多郎全集（旧全集）第四巻２６９頁８行目~270 頁８行目

２．キーワード又はキーセンテンス

或いは前者の如きものに到達した上、更に於てある場所といふ如きものを考へる要はないと云ふであらう。(269 頁８行目)

３．考察及び問い

なぜ「場所」が必要であったか。それは見る（直観する）ためである。「この花は赤い」の「この花」を主語面に、「赤い」を述語面に押し詰めると、それぞれ「眞の個物」と「眞の自己」に行き着くだろう。それは同じ『所謂眞の無の場所』であろう。その場所では「眞の個物」と「眞の自己」と「場所」は一体となっている。しかし「鏡に映す」「場所に於く」という事態においては未だ「映す我」「見る我」が残されている。三者は点在していて、一体となっていないのではないか。(２２０字)